

研究会・シンポジウム報告

2015年2月16日(月) 定例研究会報告

テーマ： ピケティ『21世紀の資本』を読む

報告者： 石塚良次

その他： 司会 相田慎一

時間： 13時00分～18時00分

場所： 社会科学研究所会議室

参加者数：14名

報告内容概略：

今注目されているピケティ『21世紀の資本』は、一般の次のように読まれている。資本主義では、格差が拡大することを膨大な納税データをもとに理論的に明らかにしたものである。格差が拡大するのは、資本収益率が経済成長率を上回るからである。 $(r > g)$ その結果、資本は相続され、資本主義も近い将来「世襲型資本主義」となるだろう。こうした格差の是正のためには、世界的な累進資本税を導入すべきである、と。このようにピケティの『21世紀の資本』は、一般的には格差の拡大を理論的に展開したものであるかのように読まれている。だが、これは誤読である。なぜなら、このピケティの著書は、実際には統計分析から格差の拡大を演繹しているのであって、格差の拡大論を理論的に演繹しているものではないからである。その点で、次のような森口千晶氏のピケティ評価は正鵠を得たものであるだろう。「ピケティは理論家でありながら、税務統計と国民所得計算から所得占有率という格差の指標を推計する方法を編み出し、自らフランスの歴史統計を駆使して新たな事実を明らかにした。」

それにもかかわらず、本書の魅力は、200年にわたる資本主義の歴史を豊富なデータをもとに、資本蓄積というひとつながりの物語として描いた点にあるとあってよいだろう。だが、同時にそこにひとつの無理が生まれる。つまり時代や国が異なるそれぞれの資本を同じ「資本」として扱うことができないのではないか、と。

記：専修大学経済学部・相田慎一